分離派教徒の世界

——R. O. Crummey, The Old Believers and the World of Antichrist によせて——

土肥恒之

(一)

「日曜日に耕すとは，おまえはきっと分離派教徒(ラスコリニク)なのだね？——いいや，旦那さん，わしはほんものの十字を切りますだ，とかれはわたしに三つ指をたてて見せた」[1]。アレクサンドル・ラジシチェフの『旅』(1790年）のなかのこの一節は，ロシア貴族の黄金時代を底辺でささえていた当時の農民の苛酷な諸負担・賦役，彼らのミゼラブルな日常生活を動かしようのない事実をもって告発した著名な箇所のほんの導入にすぎない。だがこの節は虐げられたロシア農民，という暗いイメージに加えて，さらに宗教的にも抑圧をうけていた少数派の存在を，はからずも暗示しているのである。

「火の洗礼（огненное крещение)」，あるいは二本の指で十字をきる動作で知られる分離派教徒（раскольники）の発生は，いうまでもなく17世紀半ばのニコンの教会改革にその端を発する。1652年，ツァーリ，アレクセイ・ミハイロヴィチにより総主教に任ぜられたニコンは，ただちに祈禱書の改訂と教会儀式の改正に着手した。多数の写本間で不一致がみられた祈禱書の統一，従来の二本指を改め三本の指で十字をきること，祈りの際，ハレルヤを二度ではなく三度唱えること，等々である。ツァーリとニコンの改革の真の意図は，ロシア国内の改革をおしすすめて，大ロシアの正教会とギリシヤ，ウクライナの教会とのギャップを埋め，ひいてはモスクワを名実ともに東

(1) A.H. ラジシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』渋谷一郎訳，26頁.

ローマ帝国なきあとの東方教会の総本山たらしめることにあった，といわれる。しかしながら，祈りの事柄にかんするこうした政治的リアリズムは，聖職者のみならず社会各層の反発，伝統的な保守主義を誘発せずにおかなかった。アヴァクーム，ダニイル，イワン・ネロノフ等を指導者とする「古き信仰（старая вера）」を守る運動（старообрядчество）は，当局の懸命の説得と弾圧にも拘らず，数10年のうちにロシア帝国の隅々にまで浸透し，「17世紀の最後の四半期には，その住民のなかに分離派教徒のいないロシアのなんらかの大都市を指摘することは困難である[(2)]」という状況まで達し，反国教会のみならず反政府の宗教的社会運動と化したのである。

分離派（あるいは古儀式派）にかんする研究史について，ここでは十分に展開することは出来ない。とりわけ帝政時代の分離派研究は，それ自体甚だ興味をそそられる独立の研究テーマたりうるであろう。しかしながらソヴェト史学にかんする限り，この運動の検討において極めて消極的であったといわざるを得ない。運動の指導者たちの著作とそのイデオロギーの検討は，専ら文学史家の手に委ねられてきたのであり[(3)]，階級斗争的視点にたつ分離派運動の本格的な研究が，最近ようやく開始された，という状態である[(4)]。

以下で紹介するクルメイの研究（R.O. Crummey, The Old Believers and

---

(2) А.М. Рогов, Народные массы и религиозные движения в России второй половины XVII в. «Воп. Ист.» 1973, №4, стр. 32. ウラジーミル，ヤロスラヴリ，コストロマ，ニジェゴロドの諸郷，北のアルハンゲリスク，ウラル，シベリア，南のアストラハン，ドン，テレク，ポーランド国境のヴェトカ，スタロドゥビエ，等々.

(3) A.H. ロビンソンの一連の研究．最近の А.Н. Робинсон, Борьба идей в русской литературе XVII в. М., 1974. гл. III.

(4) Н.Н. Покровский, Антифеодальный протест Урало-Сибирских крестьян-старообрядцев в XVIII в. Новосибирск., 1974 が最新の成果である．また В.С. Шульгин, Движения, оппозиционные официальной церкви в России в 30х-60х годах XVII века.（未公刊，1967）に基づく его, «Капитоновщина» и ее место в расколе XVII в. «Ист. СССР» 1967, №4 などが注目される．また，かつてのような階級闘争とは反対の方向，というような宗教運動の及び腰の扱いは，ほとんど影をひそめている．ソヴェト史学によるヨーロッパ中世の異端運動と農民イデオロギーの研究状況については，イェ・ヴェ・グトノワ「中世農民層と異端」林基訳『専修人文論集』第17号，1976年，参照.

the World of Antichrist. The Vyg community and the Russian State, 1694–1855, Wisconsin UP., 1970）は，分離派教徒のうちの一派，無僧派（беспопобцы, priestless）の最も重要な中心地であったロシア北部のウィグ僧院（Выговская пустынь, the Vyg community）の二世紀にわたる歴史を分析したひとつの事例研究（ケース・スタディ）である。ひとつのそれ自体反社会的な宗教運動の思想と行動を可能なかぎり具体的に追求することにより，この時期の政治の抑圧的側面を逆照射している点で，本書は極めて内容豊かな一個の社会史的研究でもある。公刊以来，既に7年を経ているが，本書についてはもちろん，分離派運動自体についても我が国ではこれまでほとんどその具体的内容について紹介されることがなかった。[5] 以下では，筆者の観点からとりわけ重要と思われる幾つかの事柄を選び出して出来るだけ忠実な紹介に努めることにしたいと思う。[6]

(二)

「東方教会の伝統によると，宗教生活の最も立派な形態のひとつは，孤独な隠修士的な存在であった」。事実ロシアの聖人は，森に引き籠っての孤独で瞑想的な生活及び自分の手で働くという隠修士の性格を色濃く帯びていた。ロシアの修道院の多くはこうした隠修士（隠者）が編んだ隠修所（пустынь, hermitage）から発展してきたのである。「古き信仰」運動の勃発は，こうした隠修士生活方法の魅力をいっそう増すことになった。即ち真のキリスト者は，真の信仰を堅持するためにはアンチキリスト（Антихрист, Antichrist）の権力とその道具でしかない国教会から逃れることが今や望ましいのみなら

(5) 唯一の例外が，アヴァクーム自伝の邦訳である．「司祭長アヴァクーム自伝」松井茂雄訳『スラヴ研究』№10, 1966.

(6) 著者は Old Believers を，ニコン改革前の礼拝儀式を保守し，それ故国教会のメンバーでなかったもの，と定義している．政府は，国教会から分離した全てに対して，蔑称として «раскольники» の言葉を用いたが，「全ての Old Believers は раскольники であったし，ほとんどの раскольники は Old Believer であった」.

本稿では，「分離派」ないし「分離派教徒」という訳語で統一している．

ず，義務とみなされたからである。政治権力の中心地から出来るだけ遠隔の地がそれに相応しかった。ポーランドとの国境が，白海沿岸が，ドンが，そしてウラル，シベリアの地がこうして選ばれていった。こうした行動は長期的な視野にたてば，ロシア人の個人的あるいは国民的レベルでの「危機にたいする伝統的反応」ということが出来るが，「古き信仰」を掲げる諸教派は，勝利した改革派の攻撃に対して厳しい献身的行為により自己を堅固にするためのみならず，古き儀式が維持される砦を構築すべく，住み慣れた土地を去っていったのである。

美しい森と湖の果しもなく拡がるロシア北部のオロネッツの地は，しかしながら，人を寄せつけない遠隔の地である点で，隠修士そして弾圧をうけた分離派教徒にとって「理想的な避難所」であった。この地域は地理的な意味においてと同様，政治的にも効果的な支配を許さないいわば分水嶺であったからである。

「古き信仰」の回復のために希望をさしだす，いかなる叛乱をも支持する準備があることを示した1682年の事件ののち帝位についたソフィアの時代(1682-89)は，分離派にとって弾圧と迫害の時代であった。そして追いつめられた信徒は，あるいは教会に，あるいは小屋に閉じこもり集団の焼身自殺(самосожжение, self-immolation)という極端な手段に訴えたのである。1689年，ソフィアによる「分離派教徒に対する恐怖のキャンペーン」は終った。分離派教徒の残された指導者たちが「オネガ湖の北辺と白海沿岸との中間」に位置したウィグの地へ移り，ひそかに避難所を編んだのは既に17世紀の末期であった。集団自殺(mass suicide)の伝統はその後も決して絶えることはなかったが，それはすべてが失敗に帰した時のみに採られるべきan extreme stepである，と考えられるようになった。最初，より柔軟と思われた体制(ピョートル体制)のもとで，分離派は自らのエネルギーを，殉教の準備のためではなく，自らのコミュニティ，文化，そして社会の建設のために注ぎ始めたのである。

アンドレイ・デニソフ(Андлей Денисов)の祖先は「暮しむきのよい農

民」であったが，敬虔な家庭で成長したアンドレイは，少年時代から隠修士の生活に強くひかれるものを感じていた。ウィグ附近の他の修道院に熱心に接触していた彼の才能に強く印象づけられたダニイル・ヴィクリッチは自分たちの隠修所に加わるよう勧めた。アンドレイがその招きをうけ，ウィグのコミュニティに加わったのは，1694年10月，彼が20才の時であった。中肉中背の，特に堂々たる体格というわけでもないが，彼の雄弁で平明な弁説，力強く印象的な声，そして威厳のある態度は，この小さな共同体の成員の支持を獲得していった。30才代のはじめ，アンドレイは既に，このウィグの議論の余地のない指導者としての承認をえていた。それのみでない。「Выговская пустынь は，主として一人の男，アンドレイ・デニソフの創造になるものであった」のである。

それ自体反社会的な「古き信仰」を守る人々の共同体——それは後述のように，「古き信仰」を守って蜂起し，そして弾圧された（1668–76）白海の孤島のソロヴェーツキイ修道院の再生と自覚されていた——の建設は，内外の容易ならざる困難と直面せねばならなかった。典礼書やイコンの不足をノヴゴロドやプスコフでの購入で埋め，あるいは1706年，男子の居住地から約12マイル離れたウィグの支流レスカ河のほとりに，礼拝堂，食堂，各小室，納屋からなる女子の僧院を建設し，そのユニークな形態の共同体の一応の基礎固めがデニソフの指導下に行なわれたのちにも，この共同体は次のような難局にたえず直面していたのである。即ち (1) ロシア北部の厳しい自然環境のなかで共同体が物質的にも生き延びる方途を探ること，であり，(2) 彼ら分離派教徒の破壊を目論む政府と国教会との対決，そして (3) 内部に依然として根強い黙示論的熱狂主義（apocalyptic enthusiasm）の克服，である。

冬季注意を欠くとすぐにも凍え死んでしまう国の，しかもその北部のカレリア地方で共同体が生き延びるために早急な解決を迫られたのは，穀物自給の問題であった。この地方特有の気紛れな天候，早霜は穀物が熟するまえに全ゆる作物を駄目にした。飢えに直面して，デニソフ等指導者はしばしば遠

くモスクワ，ニジニ・ノヴゴロドまで穀物の買付けに奔走せねばならなかった。残されたものは，カユ，樹皮，その他の代替物でその場を凌いだ。「状況が絶望的にみえた丁度その時，デニソフと彼の支援者がオネガ湖の北岸に，ヴォルガから船で運んできた購入物（穀物）をもって現われた。ウィグの健全な成員のすべてが穀物を積みおろし，居住地へ移すのを助けるべく群れてやってきた。彼らは極端な飢えの状態にあったので，それを移動させている間にその大部分を食べることに抵抗できなかった。にも拘らず，敏速な行動はコミュニティを救った。だがその猶予もほんの一時的なものでしかなかった」。

共同体は生き残るためには，まず経済的基盤を拡大させ多様化させねばならなかった。良質な土地を求めての調査，漁業基地の建設などあらゆる可能な手段が試みられた。また必要な時手助けとなる，土地のより肥沃な諸地域の分離派運動の共鳴者の網の目を張り巡らせねばならなかった。こうして北部の「敵対的な自然的諸条件」との「果てることなき闘争」が繰りひろげられていったのである。（ウィグの人口は最初の10年間に，約40名から100名を越えるに至った）。

ピョートル統治の初期になんとか共同体の基礎を据えることに成功したウィグの分離派は，しかしながら，いつの日にかこの政府との全面的な対決も避けられないように思われた。より柔軟と思われたピョートル政治も，その後の西欧化的諸政策——ヒゲ剃りから洋服の強制着用に至るまでの——は，国民的伝統の擁護者であった彼らに衝撃を与えた。多くの分離派教徒が，ピョートルもまたアンチ・キリストであるとの結論に到達したとしても驚くにあたらないのである。

ツァーリと共同体との出会いは，だが「全く別の理由」からおこった。1702年，スウェーデン軍の白海沿岸への上陸の危険を察知したピョートルは，アルハンゲリスクの防衛を固めるためウィグ湖を横切る，という知らせが届いた。この知らせは教徒のあいだにパニックを惹き起した。集団の自殺か，あるいは闘いによる抵抗か。指導者のあるものは，このジレンマから脱

する別の方策を探ろうとした。ピョートルの軍勢は，しかしながらウィグ湖を横切ったものの，共同体のある地域とはかなりの距離があった。また軍隊は地域住民のあいだにいたずらな騒ぎをまきおこさなかった。再び静寂な時が訪れるかに思われた。

ピョートル統治期の大半を占めることになったこの北方戦争（1700–21）は，ウィグの分離派教徒を以外な方向へ連れていった。デニソフ等が「古き信仰」の根拠地としたオロネッツの地は，既に述べたように「農民の居住には有望ではない」，農業には適さない北限の地であったが，「ひとつの天然の利」に恵まれていた。即ち大量の鉄鉱石の埋蔵地であったのである。17世紀末には既にその発掘に着手されていたが，北方戦争の開始，それに伴う国内諸改革は，国内での鉄工業の急速な育成・促進を不可欠とした。オロネッツではその突貫計画の結果，1702–03年には既に幾つかの工場の操業開始として具体化された。こうしてオロネッツの鉄工業は，この時期戦争によるブームの様相を呈しはじめたのである。

工場長には当該地域の全住民をその工場のための諸々の負担を課する権利を与えられた。鉄鉱石，木材，木炭の提出，あるいは工場労働が強制された。この点において分離派教徒の居住地域とて例外ではなかったのである。

ピョートルは公然たる反政府運動には無慈悲な，容赦なき弾圧をもって対処したが，明確な運動形態を採らない場合には，むしろプラグマティクに利用する方策をとった。分離派にたいする政策も，初期にはこうした方向で貫かれていた。1705年，政府は，宗教的寛容，ウィグの共同体の自治，と引き換えに，鉄鉱石の踏査・試掘，船による工場への運搬の義務を課したのである。その義務負担は，しだいに増していったとはいえ，鉄工場における分離派の重要な役割は，彼らを迫害から守った。このことは工場長による彼らの「一貫した支持」によっても傍証されうる。彼はデニソフの弟の逮捕・監禁という非常の時にさいして，自らツァーリ宛てにその釈放を求める請願書を書きさえしたのである。他方，ウィグの指導者たちにとって，問題のこうした解決・処理は，共同体の本質的な特徴——「古き信仰」の根拠地と組織

の建設――を破壊から救ったと同時に，誠に高価な「自由の代償」であった。デニソフの moderate な政策に終始批判的であったイワン・フィリッポフは，彼の『歴史』(История Выговской пустыни) のなかで次のように書きつけた。「この時以来，Высовская пустыньは，ツァーリのための仕事の軛のもとにおかれるようになった」と。

分離派教徒にたいするピョートルのこうしたプラグマティクな寛容政策を支えていたものは，彼らは国教会の信徒よりは迷信的であるが普遍の市民である，という認識であった。だがピョートルのこうした認識も次第に変化していった。1716年には，「古き信仰」のすべての支持者は政府に登録されなければならず，彼らは他の社会層によって支払われるであろう新設の人頭税を二倍支払らねばならない，とした (двойной подушный оклад)。この政策の狙いは，むろん国家財政の立直しと収入増にあったのだが，1718年6月の皇太子アレクセイ殺害という異常な出来事は，ピョートルの態度に更に重大な変化の契機を与えた。猜疑の眼は，彼の改革にたいする保守的反対派に向けられるようになった。この点で旧分離派教徒ピチリムの報告は決定的であった。ピチリムは転宗者に固有の熱狂主義でもって，ニジニ・ノヴゴロド地域における分離派教徒にかんする調査報告をツァーリに提出し，その地域における「古き信仰」の驚くべき数の支持者と，とりわけ「ツァーリのための祈り」という正教会伝統の祈りの拒否，という実態を暴露したからである。これはピョートルに衝撃を与えた。この時以降ピョートルはかつてのアムビヴァレントな態度を棄て，分離派教徒の組織の破壊にのりだしたのである。

ピョートルの宗教政策の変化を忠実に，しかも熱烈に遂行したのが，いうまでもなく中央行政府の協力に力を得た国教会であり，とりわけピチリムその人であった。ピチリムは分離派の根源は無知と迷信にあるのだから，ニコンの改革についての彼らの見解の誤りを示すことが，分離派教徒を一挙に改宗へ導くであろう，と単純に考えていた。その最も効果的な方法として公開討論が企画された。ニジニ・ノヴゴロド地区の分離派の著名な指導者への祈

禱書の改訂にかんする130カ条の質問状の送付と，この時期におけるピチリムの一定程度の勝利は，この一般方針へ勇気を与えた。こうして，1723年6月，当時既に国内の分離派教徒に対して大きな影響力を行使しており，それ故ピチリムにとってもその切り崩しは焦眉であった，ウィグの共同体へも公開討論への召喚状が送られてきたのである。これは共同体の内部に強い不安を惹起した。ただちに遅延作戦が採られた。こうした討論から彼らが獲得すべきなにものもない代りに，失うべきあらゆる物を持っていることをウィグの指導者たちは理解していたからである（この時準備されたのが，その後繰返し写され，分離派の護教論の隅石として力強い武器となったデニソフの«Поморские ответы»である）。

延期を重ねた末，1723年9月のある日，公開討論は開かれた。（ウィグの代表はペトロフとマトヴェーフであった）。討論は最初からその方法をめぐって折り合いがつかず，また些細なことについての互いの言い抜けが日暮れまで続いた。討論の終りに，分離派は討論へ出頭することによりその義務を遂行したことを証言する an official document を受け取った。ウィグは辛じてその危機を回避したのである。だがこの危機を切り抜けることが出来たのは，ウィグの共同体の鉄工業への参加，そこにおける重要な役割，という一点にかかっていたのである。鉄鉱石の試掘・採石の仕事が続けられる限り，共同体は国家によるいわば限られた寛容を享受しえたのである。1721年の平和とともに共同体が蒙らねばならなかった義務とその後の迫害の歴史がなによりもこのことを裏書きしている。鉄工業は，いまやウラルへその中心を移動させつつあった。国家はオロネッツ工場への援助をつぎつぎに取り消していった。工場は衰退し，ひとつまたひとつ操業中止に追いこまれた。1726年，ウィグがその労働を給付していたポヴェネッツの工場も閉鎖された。工場から解放されたウィグの分離派教徒を待っていたのは，二倍の人頭税であった。1724年から実施に移された人頭税は私領主のもとの農民には1人当り男子74カペイクを課したが，1728年ウィグの共同体員（男子）は，不断の諸困難と貧しい土地を理由に特別の取扱いを要請したにも拘らず，1

ルーブリ40カペイクを支払わねばならなかったのである。

最後にデニソフは，彼の好戦的な仲間のあいだに依然として根強い黙示論的熱狂主義との闘わねばならなかった。デニソフは厳しい迫害の時代に「火の洗礼」に加わった初期の分離派教徒の称揚において人後におちるものではなかった。しかしながら，デニソフの眼には，その聖なる実例（殉教）を負けじと競い合うかのような彼の仲間，ダニイル・ヴィクリッチ，イワン・フィリッポフ等は，政府とのデリケートな関係，組織を存続させていくうえでの不可欠な調停を破壊する危険な分子であった。分離派の第一世代の戦闘的な生き残りのひとりで，迫害の時代に非妥協を貫いたヴィクリッチは，デニソフの注意深く，プラグマティクな政策を支持しつつも，依然として，信仰のインテグリティを保持するためには殉教を主張していた。一方，次の世代に属するデニソフは，非妥協的な勇気だけでは「古き信仰」の保守という目的に導くよりも，むしろ害になるという考えにたった。こうした穏健派 moderates と戦闘派 militants, radicals との対立は，とりわけウィグの共同体にとって最も大きな意義をもつ象徴的行為であり，それがためにしばしば弾圧の危険に曝された，「支配者のための祈り」をめぐってその極に達した。アンチ・キリストの権力とのあらゆる妥協を排し，たとえ共同体の破壊につながる危険があるにしても，信仰の純粋性を保守するために，必要などのような手段をとることも辞さなかった militants にとって，「ツァーリのための祈り」は，どのような理由があるにせよ，拒否せねばならぬ第一のものであった。またウィグの共同体の各成員も，彼らの先駆とあおぐソロヴェーツキイ修道院の修道士たちが，国家への敵意を示す表現としてその行為の拒否を選んだこと知っていた。もし国家がアンチ・キリストのそれであるとしたなら，その首長のために祈ることはどうして可能であろうか。

デニソフ等の moderates は，既に帝政が，そうした拒否を認める程寛容でないことを知っていた。彼らの課題は，したがってこの「支配者のための祈り」の拒否をなんとか隠すか，あるいはソロヴェーツキイ修道院のシムボ

リックな行動は，変化した情勢にはもはや適応しない，と彼らの militant な仲間に認めさせるか，のいずれかであった。デニソフは，ある時はこの祈りの導入を意図した。だが，このことが共同体の成員の多くの激しい反対を惹起するかもしれぬという危惧のため実施されずに終った。

デニソフが指導した28年間（1702–30）は，こうして内部に moderates と militants との対立という緊張をはらみながらも，ウィグの共同体は分離派の一大中心地まで成長した。共同体の精神の独立を失うことなく，外部の世界への適応という困難な課題を成功させるためには，デニソフの類い稀れな指導力を必要とした。「実際上の事柄にかんして素晴しいセンス」と「知的才能」をもった，「非妥協性とロマン性をわかち持っていた組織家であり政治家」アンドレイ・デニソフは，1730年はじめ，健康が悪化し，3月1日，56年にわたるその生涯を終えた。この間，デニソフは過去のロシアの大聖人に比肩しうる権威を獲得したのである。

だが，本当の危機はデニソフの死後間もなく襲ってきた。アンナ・イワノヴナの時代（1730–40），エリザヴェータの時代（1741–61）は，ピョートル体制の継承と強化の時代であった。例外は除去され，抜け道は閉鎖された。分離派は，ふたたびそして究極的に，「ツァーリのための祈り」を採り入れ国家権力へ服従するか，あるいは最後までそれに抵抗するか，という明確な二者択一を迫られたのである。moderates にとっては，終末にいたるまで真の信仰の堡塁たることが主目的であるのだから，共同体とその使命を救うための妥協は，第二義的なものであり，許されうるように思われた。だが，militants の眼には，いかなる妥協も致命的なものにみえた。ある者は，仲間とともに新しい拠点を築き「古き信仰」の伝統を汚れのないまま保存しようとした。（филлиповщина）1742年，政府の調査団がこの隠れ家に近づいた時，50名の最後まで非妥協的な仲間は，集団的自殺に訴えた。またある者は，ウィグから逃亡し，ノルウエーの北端，ノース・ケープにコロニーを建設した。

1740年代の徹底的な弾圧ののちも，ウィグは危機の時代に蒙った損失を

十分に埋め合わせ，分離派内では依然大きな，繁栄している一大勢力でありつづけた。だがそれにも拘らず，共同体は「忘却への長い衰退を開始した」。国家との妥協は仲間の信頼を失わせ，指導者に忠実であったものさえ，危機の時代の狼狽と無力の思い出を胸に，共同体を去っていった。ウィグは，なおしばらくの間繁栄をつづけたけれども，既にその鋭利な刃をそぎ落していたのである。

(三)

分離派運動をひろく研究した最初の sympathic outsiders である19世紀後半のナロードニキの歴史家たちは，その運動が，原則的にはますます抑圧的な傾向を示しつつあった行政と社会慣行の西欧化に対する下層階級のプロテスト運動である，と理解していたから，彼らはごく自然に次のように結論した。即ち分離派の中心は，形のうえでは修道院であるが，その本質は共同体的な農民村落であると。またナロードニキの歴史家は，その内部組織さえもロシア北部の農民のデモクラティクな伝統を反映していると考えた。しかしながら，A. デニソフとその他の指導者たちの著作は，ウィグの共同体があらゆる意味において，ひとつの修道院であり，しかもこの修道院は，「古き信仰」を守って弾圧をうけ滅んだ，あのソロヴェーツキイ修道院の再生であり，その正統な継承者であることを明確に述べているのである。

ウィグの共同体は，最初分離教徒によって建造された他の幾百のそれと同じく，隠修所（скит, hermitage）でしかなかった。だが運動の初期の指導者の多く，そして彼らの弟子たち——デニソフもその一人であった——は隠修士の生活へ魅力を感じていたが，修道院生活が彼らの信仰の唯一の適切な表現である，という確信をともにしていたように思われる。また初期の指導者のなかには，ソロヴェーツキイ修道院の蜂起の鎮圧後，逃亡してきた修道士が含まれていたことも忘れてはならない。こうして，ウィグの建物は，1730年代までに，単なる小屋の群居から伝統的なロシアの修道院風の建物へと成長を遂げていたのである。ここでこの「修道院」の聖務日課と規則及

びその思想的基盤を簡単にみておこう。

ウィグの一日は，朝の三時間の祈りから始まる。夕べに同じ三時間の祈り，そして日曜日の夜には五時間の，そして特別の宗教儀式には終夜の祈りがおこなわれた。これらの祈りは，年4回のコンフェッションとともに，指導者の厳しい監視のもとで行なわれた。全ての構成員がすべての行事に参加した。個人財産は一切禁止された。衣服，食事は画一的なものであったが，共同体の構成員にとっては満足すべきものであった。昼食にはふつう三皿（魚，スープそしてカーシャ），夕食は二皿であった。ウィグの経済活動は，後世の歴史家の眼を見張らせるものがあったが，個人のイニシアティヴで事業を行うことは，むろん禁止されていた。

A. デニソフと共同体の他の指導者たちは，広大無辺のロシアに散在している分離派教徒――それは貴族，商人，農民の全階層にまたがっている――を，それ自体ひとつの完全な対抗社会（a complete counter-society）として心に描いた。彼らは国教会を支持する人々からは分離していたが，ニコン以前の社会を継続しているという自覚にたっており，それ故，ウィグは北部及び中央部の分離派教徒を結びつける神経中枢たるべく努力したのである。18世紀前半のウィグは，分離派教徒の文字通り「文化的首都」であった。そこでは数巻本の護教論，礼拝文献の作成，イコンの製造，等の仕事がなされ，また自らの教育制度を持っていた。巡礼や物乞いのために宿が設けられ，来往者すべてにたいして食事とそして隠れ家が提供された。アンチ・キリストの世界において，各地に散在していた分離派教徒たちは，彼らが物質的そして精神的支持を向ける中心を必要としていた。多くのものは，ウィグにそれを発見したのである。

ウィグの指導者がとりわけ細心の注意と厳格な制限を設けたのは成員間の個人的接触であった。純潔は，ロシアのみならず修道的生活の本質であるが，男子の僧院と女子のそれとの結合というユニークな形態をとっていたウィグの共同体の存続にとって，その意味は特に大きかった。女子僧院への立入りの禁止，外出のチェック，などこの点に関して数えきれない程の規制の

網の目が張りめぐらされたのである。1694年のノヴゴロドでの無僧派の指導者の会合は，結婚についてのきわめてラジカルな見解をうちだしていた。即ちニコンの改革はアンチ・キリストの統治を告げるものであり，さし迫った終末を予告したものである。そのような時，真の信仰をたもとうとするものは，すべて自らを世俗のあらゆる責務や享楽から解き放つべきである。会合は，こうした理由により，すべての既婚の信徒に分離すべきことを命じたのだが，この勧告を厳しく実践したのが，ウィグの共同体であった。国教会で聖別された結婚の承認は，アンチ・キリストの権力との妥協を意味したからである。(デニソフは，他の共同体のよりフレキシブルな態度に痛烈な批判をくわえ，このことが無僧派の分離派を永久に二分することになった。即ちデニソフ等の поморец と，フェオドシイ・ワシリェフ等の федосеевщина である)。

ウィグの教父たちは，彼らの仲間に，彼らのロシア社会からの孤立の理由を説明し，また国教会及び世俗権力への彼らの抵抗を正当化し，そして彼らの分離派運動が窮極的に勝利をおさめる，という希望を与えるべく，「ひとつの完全なイデオロギー・システム」をうちたてようとした。ウィグの教父たちに，殉教の歴史を含めて歴史にかんする著作が多いのはこうした理由に基づくものであり，彼らこそが終末に至るまでの真の正教会を守る僅かに残った信徒であることを示すためであった。ロシアはキエフのウラジーミル大公の改宗により真の信仰を受け入れ，それをほとんど七百年のあいだ堕落させることなく維持してきた。ニコンの改革が，この純粋なロシア正教会を腐敗させたのである。したがって，ただ分離派教徒のみが真の正教会を維持し，ロシアのユニークな救済の使命を続けうるのである。

こうした観点にたつ時，正教会の担い手についての従来の見解は修正されなければならない。正教会の真の担い手は，モスクワ国家やその支配者ではなく，ロシア教会の聖人たち，全体としてのロシア人である。もしロシア正教会の担い手がツァーリであり国教会であるとするなら，その時，分離派教徒は，ニコンの諸改革をふくむ，正教会のいかなる教義・実践から分離・逸

脱する権利を持たないことになる。他方，もしロシアの聖人そしてロシア人が真の正教会を継受する媒体であるとするなら，分離派教徒は，ニコン派と同じく，その後継者であると主張する権利を持つのである。デニソフ等は，キリスト教世界におけるロシアの特殊な位置と自らの役割を，以上のように提示したのである。こうして，«Поморские ответы» が国教会側の攻撃にたいする論争の武器であったのに対し，その数多くの歴史的著作は，信徒に自らの信仰・祈りについての確信を与えたものであった。

(四)

著者クルメイはウィグの分離派の歴史を二つの時期にわける。第一期は，ニコンの改革に対するプロテストからピョートルⅢの即位（1762年）までで，この時期は，これまでの紹介で明らかなように，迫害された地下運動の時代であった。それに較べて次の第二期は，いわば寛容の時代であり，地下から地上の運動へ，またその運動の中心も辺境の地からモスクワへ移された。モスクワ郊外のプレオブラジェンスクの共同体は，しだいに遙か辺境のウィグを凌ぐ富と影響力を示し，無僧派の分離派教徒の最も重要な中心地に成長をとげていったのである。その歴史上はじめて，迫害の恐怖なしに生活出来た寛容の時代は，だがウィグにとっては同時に衰退の開始を告げるsilver age でもあった。1740年代の徹底的な弾圧ののち，ウィグはいかなる意味でも，帝政レジームの危険な政治的反対分子ではなかった。だが，決意の固い宗教的少数者とその要塞の存在そのものは，依然，政府の抑圧の対象となったのである（ニコライⅠ世の時代）。1820年代でさえプレオブラジェンスクの，ある真面目な尊敬すべき商人が，二本の角と尻尾をもち，額に666の数字を刻んだアレクサンドルⅠ世の肖像をひそかに持ち続けていた事実は，弾圧後の分離派教徒の屈折した心理状態を雄弁に語っている。

だが，本書の主要なスペースは，第一期とりわけアンドレイ・デニソフとその時代のウィグの歴史にさかれており，本稿でも専らこの時期に焦点をあわせて紹介してきた。紙幅の都合上触れることの出来なかった重要な問題も

少なからず残されているが，最後に，分離派の起源についての著者の興味深い見解を採りあげ，若干のコメントを加えておくことにしたい。

著者は分離派運動をはじめて，しかも共感をこめて研究したナロードニキの歴史家（ア・ペ・シチャポフと彼の学派）によるその起源論を高く評価している。即ちナロードニキの歴史家の強調は，分離派の運動が，当時のロシア社会で進行中の一連の抑圧的諸傾向，即ち中央集権化，官僚制化，そして農奴制の強化，更には旧来の諸制度や慣行への西欧の影響力のたかまり，等にたいする抵抗の表現であり，ニコンによる教会儀式改革は，そうした諸々の傾向への反発をひとつに結びつける触媒の役割を果した，という点にあった。ロシア正教会の分裂にまで導いた，一見ささいな，ニコン以前の典礼の保守，という分離派の頑固な主張は，こうした社会的背景ヌキには考えられないのである，と。

ナロードニキの以上のような起源解釈は，その本質に迫るものがあるが，著者によると，更にそれ以外の「二つの要素」が考慮されなければならない。ひとつは，当時のロシアの文化的空気 cultural atmosphere，具体的には終末論的思想状況である。17世紀半ばの鋭い社会的緊張，1654年にモスクワを襲った黒死病，都市住民のなかば定期的な蜂起，こうした時代の雰囲気の中で，終末についてのさまざまな予言が人々を捉えた。農民のあいだでは，隠修士カピトンの生涯と教え――終末が間近であり，アンチ・キリストが既にこの世を支配している――，その禁欲的行為の中にそれが明瞭な表現をとっているように思われた。教育あるものは，ウクライナ起源の，未曾有の普及をみせた黙示論にかんする著作のなかに，その思索の糧をみいだしたのである。

次に，ロシアの社会構造が持つ宗教上の及び心理的な含み，について考慮されねばならない。端的にいえば，当時の社会は，僅かのエリートと大多数の農民大衆の構成する，相互にまったく疎遠で，しかも浸透することのない「二つの文化」を持つ社会であった。17世紀のロシアは，ヨーロッパ，ウクライナそしてギリシャから深い文化的影響をうけた時期であったが，こうし

た外国の思想や慣行が，僅かのモスクワ・エリートに人格形成的作用を及ぼしたとしても，人口の圧倒的大多数を占める農民には，何程のイムパクトも及ばさなかったのである。こうした社会構造のなかで，教会の儀式改革とは，農民にとって何であったのか。

農民はふつう国の行政・文化の中心地からは遠い小さな村に住んでおり，その文化的生活の中心は，教区教会であり，とりわけそこで執り行われる典礼であった。典礼が東方教会においては特別の重要性をもったこと，そして無学な農民にとって，その儀式と教義が分離されざるものとして意識されていたことに多くの説明はいらないだろう。こうした環境——加えて社会不安——のなかで，ニコンの儀式改革——それはどの点からみても第二義的重要性しか持たない——は，どういう作用を及ぼしただろうか。村の司祭が，すべての儀式のしぐさのなかで最も頻繁に繰り返された二本指での十字を三本の指で切るよう，またハレルヤを二度ではなく三度，プロセッションの方向を変えるよう，云った時の信徒の驚倒を，我々はよくイメージ出来るのである。こうした独断的な変更は，正教会の信仰そのものを転覆するように見えたかもしれないからである。ニコンの改革は，こうした意味で，「古き信仰」として知られる民衆のプロテスト運動を点火した花火であったのである。

17世紀ロシアにおける終末論的思想状況については，既にチエルニアフスキイとシユリギンの指摘がある（M. Cherniavsky, "Old Believers and the New Religion," Slavic Review, No. 25., 1966, В.С. Шульгин, «Капитоновщина» и ее место в расколе XVII в. «Ист. СССР» 1967, № 4）。また18–19世紀のロシア社会が，相互に排他的な「二つの文化」を持っていたことは，むしろ常識に属するだろう。著者の見解がもつ力強い説得性は，17世紀のロシア——それは西欧化の起点であった——について，「二つの文化」の視点を大胆に導入したのみならず，これを当時のロシアの終末論的期待と結びつけた，その独特の方法にある，と思われる。こうして著者は，ナロードニキ的見解を積極的に採り入れつつ，更に説得的な論理の展開に成功している，といえるだろう。だがここでは，当時のロシア社会のもうひとつ

の側面に注意を喚起して，本書の紹介を終わることにしたい。

1649年の会議法典によって，少なくとも法的に確立したロシア農奴制は，だが決して，安定した農業社会の成立を告げるものではなかった。16世紀末の『動乱時代』以来，農民（そしてホローブ）の大規模な逃亡は，17世紀を一貫しており，18世紀にはいっても，増加こそすれ減ることはなかったからである。この点に関して，ここで述べる余裕は全くないが，既にП.K. アレフィレンコとK.H. シチェペトフによる18世紀前半における政府の大がかりな逃亡民捜索の実施の解明，またプガチョフ前夜の逃亡農民についてのB.B. マヴロージンとT.П. ボンダレフスカヤの研究はこのことを明瞭に指摘している。逃亡こそ17-18世紀ロシア農民の最も基本的な斗争形態の一つであったのである。国家はこの逃亡民の流れを堰き止めるのに忙殺され，その方法をめぐって深刻な政治的抗争が展開された。更に，17世紀以来の南部の肥沃な諸地域への内地植民とそれに伴う労働力の移動，あるいは出稼ぎ労働の活発化が，これに拍車をかけたのである。これらの事は，当時の農奴制社会が依然として動きの激しい社会であったことを物語っている。したがって，分離派教徒の発生，その蔓延，あるいは辺境での共同体の形成という現象に，安定した社会からの脱出，という具合に，あまりに象徴的に考えることは危険であり，むしろ，一見牢固にみえる当時の社会体制の底辺でのこうした流動性にこそ眼を据えなければならないように思われる。